

観心本尊抄のあと

浅井円道

一

日蓮聖人の思想信仰について、周知のこととして、佐渡期は正宗分、身延期は流通分であるといわれる。佐渡期を正宗分というのは、『開目抄』『観心本尊抄』などの聖人の代表的著作が佐渡期にあるからであろう。

ここで一考を要することは、では聖人の思想信仰は観心本尊抄以後は全く進展を見なかったかということである。しかしこう考えるのは、常識的には妥当ではない。人は、殊に努力精進を怠らない人は死に至るまでつねに日進月歩するはずである。釈尊も三十成道のときはまだ自覚が完成したのみで、その後の五十年の覚他の行があつてはじめて自覚と覚他にわたつて覚行を円満された。聖人の場合も然り、佐渡期でたとえ教学の骨子が完成したとしても、身延期のあの老大な御消息を通しての化他行があつてこそ、覚行を円満されたと拝察する。

まだ個の中に内蔵された段階の真理と普遍化され終った暁の真理とは、勿論真理に二つはない道理であるが、現実の場に視点を置いた場合は、不遍と遍との差があるばかりでなく、その質までが違つてくるというのが、いつわらざる感觸であらう。

二

では流通分の身延期に、観心本尊抄以後の進展がどれだけ期待できるか。この点について誰もが直ちに指摘できる

ことは破邪の面、中でも台密批判であらう。観心本尊抄に限らず、佐渡期の御書は台密批判・円仁円珍安然批判はまだ微々たるものであり、身延期の撰時抄や報恩抄等に至って漸く高潮した。

今はこれら問題の一切を網羅することは省略して、比較的私の念願から遠かった事柄の一つについて述べてみたい。

それは上行自覚の表現上の問題である。人開頭の開目抄では御自身が法華經の行者であることを自認・認他するために、経文と自己の体験との符合や自身が内懐しつづけてきた誓願について熱い言葉で語り、上行自覚の基盤的構造の発表を見たが、上行自覚そのものについては、宝塔の涌出、分身の来集を述べ、次に

其上に地涌千界の大菩薩大地より出来せり。積尊に第一の御弟子とをばしき普賢・文殊等にもにるべくもなし……補処の弥勒猶迷惑せり。何に況や其已下をや。此千世界の大菩薩の中に四人の大聖まします。所謂上行・無辺行・淨行・安立行なり。此の四人は虚空靈山の諸大菩薩等、眼もあはせ心もよばず……大公等の四聖の衆中にありしにたり。商山の四皓が恵帝に仕へしにことならず。巍々堂々として尊高也。釈迦・多宝・十方の分身を除ては、一切衆生の善知識ともたのみ奉ぬべし（定遺五七二—三）

という文が一箇所あるにすぎない。ここは勿論甚深の心で読まねばならぬところであるが、概していうならば四菩薩はまだ教相上での代表的人格であるに過ぎない。

昭和定本によると、佐渡配流後最初の書簡である富木入道殿御返事に

天台伝教は粗積し給へども、之を弘残せる一大事の秘法を此国に初て之を弘む。日蓮豈其の人に非ずや……経云有四導師一名上行云云（同五一六）

とあり、自覚表現は東山に月が出ようとして、まだ出ざるの状態であるが、明かにそこには上行自覚の表明がある。この書の直前に佐渡以前の最後の書簡、同じく富木氏へ宛てた寺泊御書があり、

日蓮は八十万億那由他の諸菩薩の代官と為て之を申す。

と述べておられる。わずか一月間の間にかくも変化が出たことについては、既に一妙日導が『祖書綱要』に驚嘆した通りであるが、その経緯を追想すると、文永八年九月十二日の松葉谷召捕から竜口の頸の座、依知、寺泊に至る約五十日にわたる期間は、聖人にとって、やっとのことで堪え抜くことのできた精神的重圧であったろう。右往左往して定まらぬ不安定な幕府の処置のただ中であって、まず想到されたのは勸持品の三類の強敵の経文であったろう。経文も現実には体験すれば、その敵肅さにただ喘ぐのみであったろう。この喘ぎの中であって、共に喘いだ人は八十万億那由他の菩薩であった。そこで直截に自身を八十万億那由他の菩薩に比定されたと思う。その後幕府の処置も佐渡流罪に一決し、聖人もやや心の鎮静を得て、静かに経文を顧みれば、三類の強敵を堪え得る人は地涌の菩薩らであり、その代表者である上行菩薩に外ならない。かくて「一名上行」の経文が御口を突いて出たのである。開目抄に御自身|| 上行菩薩の表明が明瞭でないのはさらに時が熟するのを待って之を押しえておられたと考える外はない。

一年後の観心本尊抄では第三段の流通分に末法能弘の師のことが語られるが、地涌千界の菩薩に関する文例を逐一挙げれば

- 1 末法の初は謗法の国にして悪機なる故に之を止どめ、地涌千界の大菩薩を召して、寿量品の肝心たる妙法蓮華經の五字を以て閻浮の衆生に授与せしめたまふなり(第二十三番)
- 2 本門の四依は地涌千界、末法の始に必ず出現すべし。今の遣使還告は地涌なり。是好良薬とは寿量品の肝要たる名体宗用教の南無妙法蓮華經是れなり(第二十四番)
- 3 此の十神力は妙法蓮華經の五字を以って上行・安立行・淨行・無辺行等の四大菩薩に授与したまふなり(同)
- 4 今末法の初、小を以て大を打ち、権を以て実を破し、東西共に之を失し天地顛倒せり……此の時、地涌の菩薩始めて世に出現し、但だ妙法蓮華經の五字を以って幼稚に服せしむ(第二十九番)

5 此の四菩薩、折伏を現する時は賢王となって愚王を誠責し、摂受を行ずる時は僧と成って正法を弘持す（同）

6 今の自界叛逆・西海侵逼の二難を指すなり。此の時、地涌千界出現して本門の釈尊の脇士と為り、一閻浮提第一の本尊、此の国に立つべし（第三十番）

7 四大菩薩の此の人を守護したまはんこと、大公・周公の成王を摂扶し、四皓が恵帝に侍奉せしに異らざる者なり（同）

という。文上では地涌千界の菩薩を他者として述べているかの如き趣きであるが、地涌千界は末法の初に出現し、妙法五字を末代幼稚に服せしめ、また一閻浮提第一の本尊をこの国に立てる人であるというから、それが聖人を指すこととは明白である。しかし1・2・4・6の文では「地涌千界」、3・5・7の文では「上行・安立行・淨行・無辺行等の四大菩薩」「四菩薩」「四大菩薩」というが、まだ御自身||上行菩薩には落居していない。また「迹化」という表現、「本門の四菩薩」（同七二〇）という表現には接するが、本化とは云っていない。

開目抄以前に生死一大事血脈鈔（同五二四）、観心本尊抄以後に四条金吾殿御返事（同六三七）、諸法実相鈔（同七二五）等があつて御自身||上行の自覚が表明されているが、真蹟現存の確実な遺文としては、身延入山と同時に発表された法華取要抄に

是の如く国土乱れて後、上行等の聖人出現して、本門の三つの法門これを建立し（同八一八）

と述べ、まさしく上行菩薩の応現をもって自身にあてられるのを、上行自覚の表明の初めとする。観心本尊抄はこの自覚の表明の過程の中にあり、いまだ地涌千界、本門の四大菩薩を表明する段階に留まるものである。

三

観心本尊抄の

像法の中末に観音薬王、南岳天台等と示現し、出現して迹門を以て面と為し、本門を以て裏と為して百界千如一念三千、其の義を尽せり。但だ理具を論じて、事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊、未だ広く之を行ぜず（七一九頁）

の文は広く我等の知るところである。ここで理具と事行という用語で台当を相對するが、こういう相對の言葉は勿論本抄が始めてである。そしてこれが理具理行と事具事行の相對の意味であることはいうまでもない。

理具とは、本抄が示すところによれば、冒頭引用の「摩訶止觀第五」の「此三千在一念心、若無心而已、介爾有心即具三千」の文と「妙樂大師（弘決第五）」の「当知身土一念三千、故成道時稱此本理、一身一念遍於法界」の文に依るべきである。止觀では僅かでも心が動きさえすれば、その心に三千を即具するといひ、弘決では釈尊が成道されたとき、仏の一身一念（つまり仏の色心）は法界（つまり一切衆生）に遍満したという。止觀も弘決も共に理論の段階において十界（中でも我等が具足を熱望するのは仏界）の本具を理談しているのであって、現実においては十界の中の地獄の様相を現出している時や餓鬼がいつも表面に出ている人や、乃至云云、千差万別であり、仏界を顕現している人は絶えていない。しかし理論上は本具するはずである。これを理具という。さらにまた「現前せずと雖も」「冥伏して心に在り」（観音玄）、つまり心性の次元において具有を諒承することを理具という。事具は理具とは對蹠的に、理論上からではなくて事実の上において具するや否やを問題にする立場であり、また心性に冥伏して本有するということではなくて、いつ始めて具有するにいたったかを問題にしなければならない。

従つて心性に理具される仏界を己心に拡大してゆくことを修行とする天台宗では、心性を觀することを主眼とすることになるから、無相なる觀心の理行である。ところが事具は末代の無智・悪人・謗法という人間の現実に立つから、仏界を具有しない末代凡夫が仏界を具有する方法として、妙法五字（釈尊の因行果徳）の受持が結示された。

問題は、「事行」とは次の「南無妙法蓮華經の五字」を指すと思いがちであるが、実はその次の「本門の本尊」ま

で掛かることに注意しなければならない。能観と所観とが両存しなければ「行」は成立しない。故に末代の能観たる本門の題目と末代の所観たる本門の本尊とを合して始めて「修行」は成立する道理である。止観の修行は一心三観を修して不可思議境（一念三千）を完全に認知し、眼のあたりに己心の仏界を見るにあらざるが、仏を見奉るということは末代の凡夫には叶いがたい。そこで修行完成の暁に見るはずの無相の仏界（時我及衆僧 俱出靈鷲山）を有相化したのが、前の所謂本尊段で示された「其の本尊の体たらく」云云の大曼荼羅である。聖人以前に真言宗の曼荼羅があるが、事相三密といわれるように、意密の観本尊は無相なる仏の証悟の有相化に外ならない。真言宗に詳しい聖人の意中にもこの心は残存したはずである。本抄にはなお本門の法体を理談する四十五字があるが、総括すれば、本抄では本門本尊に向かって本門題目を唱える、末代の観心修行の骨子が示されたわけであり、流通分にこの大法の広宣流布の時は「末法の初」、弘通の導師は「地涌千界」であることが懇説されてはいるが、この忍難弘通が「事具」の表明そのものに外ならないということについてはまだ言及がない。この点に言及されたのは身延期、殊に撰時抄と治病抄である。

撰時抄は身延御入山第二年月の建治元年、五十四歳の六月の撰、御自身こそが仏記の聖者上行菩薩であることを明かす中に

余に三度のかうみやう（高名）あり。一には去し文応元年……二、去し文永八年九月十二日……第三、去年^{文永四年}月八日……。此の三の大事は日蓮が申たるにはあらず。只偏に釈迦如来の御神^{ごたまし}我身に入かわせ給けるにや。我身ながらも悦び身にあまる。法華経の一念三千と申大事の法門はこれなり。経に云、所謂諸法如是相と申^まは何事ぞ。十如是の始の相如是が第一の大事にて候（同一〇五三―四頁）

とあり、聖人の三度の予言は「只偏えに釈迦如来の御魂、我が身に入りかわらせ給ひけるにや」、つまり己心の所具の釈尊がわが口を借りて予言されたのである。「法華経の一念三千と申す大事の法門はこれなり」、つまり外界に向

かつて己心の積尊を顕現することが法華經の本門寿命品文底の事具一念三千の法門であると誠める。理として心底に冥伏しているというだけでは宝の持ち腐れにすぎない。譲与されたからには、具有したからには、具有した証拠を態度で、言動で外に表出するところに事の事たる所以があるというわけである。そのことを「十如是の始の相如是が第一の大事にて候」という。相とは外相であり、相如是と転ずるのは玄義二上によると中道実相の読みである。己心の積尊を表するのであるから、仏智の境を示して中道実相に読まれたのであろう。

次に治病抄は身延御入山第五年目の弘安元年、五十七歳の六月の撰、抄末に

止観に三障四魔と申は權經を行ずる行人の障にはあらず。今日蓮が時具に起れり。又天台伝教等の時の三障四魔よりも、いまひとしをまさりたり。一念三千、観法に二あり。一理、二事なり。天台伝教等の御時には理也。今は事也。観念すでに勝る故、大難又色まさる。彼は迹門の一念三千、此は本門、一念三千也。天地はるかに殊也こと也(同一

五二二頁)

とあり、日蓮が修する観法は事であり、本門一念三千であるから、天台伝教が修した理、迹門一念三千より観念が勝る。故に三障四魔・大難が天台伝教の時より激しいのであるという文であるが、この「大難色まさる」のは聖人の折伏が激しいからであり、折伏とは即ち己心中の本門の積尊の激しい自己主張に外ならぬから、結局は、外界に向かつて己心の積尊を顕現することを指して「事」「観念すでに勝る」といわれたわけで、さきの撰時抄と同じパターンである。

観心本尊抄以後に加重された法門は、まだまだ数多いが、一往、以上にとどめる。